



## ●●●●●● S-KYT (消防団危険予知訓練) を実施して ●●●●●●

仙台市泉消防団 本部 副分団長 柴田 孝一

### 1 はじめに

仙台市は、1601年に伊達政宗公によって雄藩の城下町として開かれ、「東北地方における経済、行政の中核都市」として発展し、現在、人口100万を有する東北地方最大の都市となっております。その中で、泉消防団の管轄であります仙台市泉区は、仙台市北部、宮城県のほぼ中心に位置し、泉ヶ岳や七北田川などの自然環境に恵まれている一方で、泉中央地区は、都市機能を併せ持っているとても住みよい街です。

泉区域は、東西に約21.4kmと長く広がり、面積は、145.78kmと広大であり、「泉」の名は、泉地域の前身、「泉村」に由来します。村名の「泉」は、七北田川の水源地である「泉ヶ岳」に由来しており、その「泉ヶ岳」の名は、池や沼があり谷川が音を立てて流れ、清水がこんこんと湧き出す様子からつけられたと言われてい

ます。

昭和30年代後半から区域東南部の丘陵地で住宅開発が進み、以後、区の中央を流れる七北田川を挟んだ丘陵部を中心に、大小の新しい住宅地が形成されています。泉中央とその周辺地域は、泉区役所、地下鉄泉中央駅を中心にベガルタ仙台の本拠地「ユアテックスタジアム仙台」、屋根付き多目的グラウンド「シェルコムせんだい」、ごみ焼却余熱を利用した複合健康施設「スポパーク松森」などの文化・スポーツ施設や駅前広場、ショッピングセンターが整備され、

商業や産業の中心地となっています。

### 2 仙台市泉消防団沿革

明治25年3月旧根白石村は、50名の組員をもって区内の消防に当たっていましたが、同27年2月区内有志協議の上、私設消防組に改めポンプ1台を購入し、消防組員50名としました。また、明治35年頃、旧七北田田野村部落に火災が頻繁に発生したため、部落民は自主的に腕用ポンプ1台を購入し、30名の消防組員で組織し消防活動をしておりました。さらに、昭和30年4月に旧七北田村、旧根白石村が合併して泉町となり、14分団が設けられ、昭和43年8月に1分団が増設され、15分団に編成されました。昭和46年の市制施行により泉市、泉消防団となり、さらに、昭和63年3月に泉市は、秋保町と仙台市と合併し、泉消防団となり現在に至っております。現在は、15分団423名（定員430名）の団員によって日ごろから地域の安全・安心を守っております。

### 3 「S-KYT研修」を実施した経緯

S-KYTの研修を初めて受講したのは、2年前（平成18年度）であり、このとき、仙台市の6消防団の代表が集まり研修を行いました。このときの研修内容が大変良かったので、泉消防団でも是非、単独で行いたいと思い、今回、平成20年度の泉消防団事業計画に盛り込むことにし



講演の様子



タッチアンドコール

ました。

普段から、「事故防止！」と会議・研修のたびに言うてはおりますが、実際にどのように、どんなことに注意していけば良いのかは、各分団・個人に帰することが多々あります。まさに、このS-KYT研修は、事故防止をテーマに具体例を基に参加者全員で考えていく研修であり、当泉消防団にとっては、良い研修でありました。

#### 4 「S-KYT研修」を実施して

さて、研修と名のつくものは、堅いイメージ

が付きものですが、そういう意味で、今回の研修もどうなることやらやや不安でした。

そうこうしているうちに、消防団員30名が出席し、基金の講師による研修会が始まりました。講師は、偶然にも地元、仙台市消防局を退職されたOBの方であり、あいさつの中で、現役当時の話や泉消防団との思い出などを話されたので、なごやかな研修会のスタートとなりました。

研修会は、各班単位に分かれ、講師指導のもと、ビデオ研修やイラストシートにより潜んで

いる危険要因を考察し、いかに事故を防ぐことが出来るかについて、皆で話し合い、最後に班ごとに全員の前で発表しました。また、「指差呼称」や「指差唱和」も行いました。当初は、恥ずかしさも手伝って、指差呼称を行うときは、声も動作も小さかったのですが、講師の巧みな指導により徐々に大きくなってゆき、最後には皆さんの声が研修会場に響くくらい大きな声になっていました。お互いに声を掛け合うことや普段から団員の健康状態を確認しておくことが、安全に繋がることなどを研修会により検証することができました。

また、この研修会の良いところは、一方的に講師の話聞くだけでなく、映像や実技を取り入れるなど受講者を飽きさせない内容であり、研修後のアンケートには、「研修は、あっという間の4時間だった」とあり、また、「非常に有意義であった」との団員からの声が多数見られました。これも、本当に講師である鈴木

指導員のおかげと感謝しております。

## 5 今後の取り組みについて

この研修会を開催したことにより、公務災害（事故）等が起きない…とは言い切れませんが、今回、受講した団員1人ひとりが事故防止・安全確認の意識を高めたことは確かです。そして、研修で、聞いた話を所属分団に持ち帰り、各団員に対し、研修内容を話すことで安全に対する『意識の輪』が広がることは言うまでもありません。また、今後も我々幹部が率先して事故防止に努めていかなければなりません。そのためには、このS-KYT研修のみならず、消防基金が実施している「消防団員安全管理セミナー」、「消防団員健康セミナー」などの研修を定期的に受講し、地域の安心・安全を守る消防団員の安全に対する意識の高揚を図りたいと考えています。



指差唱和